

豊かな緑を次代へ

高岡市農協青年部 西島 恒雄, 北 敏晴
他青年部員一同
富山県農村医学研究会 大浦 栄次

はじめに

私達、高岡市農協青年部は生命を生み出す産業、いわゆる生命産業である農業に従事しています。様々な産業の中で命を生み出すのは、林業と農業だけです。

今日、地球の自然環境を守る運動が様々な形で展開されています。熱帯雨林や原生林の乱伐は、地球規模の気象条件も変えると言われています。また、ヨーロッパでは産業活動による酸性雨の問題も深刻です。しかし、自然が失われているのはなにもアマゾンの山奥や、ヨーロッパだけではありません。私達の身の回りで日々起こっています。

私達の身近な自然を守ることが、地球規模の環境破壊を防ぐ最も重要なことと考えます。私達、高岡市農協青年部は命を生み出す産業に従事するものとして、人間のみならず、他の生命を守ってこそ、豊かな稔りを得ることができると思います。

そこで、これまで身近な自然環境である水問題をとりえ、数年にわたる調査結果を「ゆたかな水を次代に」としてまとめ、自然環境を守る運動を展開してきました。今回、さらに緑の問題を取り上げました。

ところで、私達の身近な緑はどうなっているのでしょうか。

青年部では、富山県農村医学研究会の協力を得て、最も身近な屋敷林などについてアンケートによる実態調査、及び比較的緑を残している神社の杉の木の活力度台帳を作成しま

した。

アンケート調査の結果からは、最も身近な屋敷林の杉がこの20年間に半数以下になったことが分かりました。

また、神社の杉の木の活力度台帳は、今後何十年にもわたって活力がどの地域で、どの程度落ちていくのかを知る上で貴重な台帳と言えます。

以下にその結果について報告します。

I. 「あなたの家の緑の調査」

1. 調査方法

1990年6月、資料1の調査用紙を高岡市農協青年部員を中心に、アンケート調査を実施しました。

回収された調査用紙は712枚です。

2. 調査結果

(1) 1970年、1980年、1990年における屋敷林の杉の木の本数の変遷

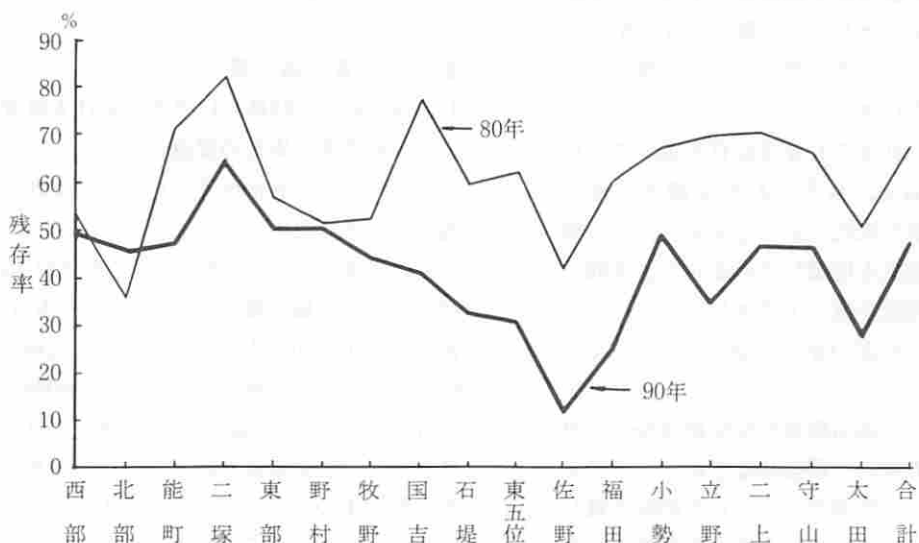
表1、図1に各地区別の杉の木の本来の本数の変遷を示しました。

その結果、712戸の回答のうち有効回答625戸の杉の木の総本数は、1970年4,587本、10年後の1980年3,095本であり1970年に比較して67.5%、約2/3に減少し、さらに1990年には2,172本、47.4%に減少しています。つまり、日本の長い歴史の僅か20年の間に、屋敷林の中で最も中心を占めていた杉の木が半分以下に減少したということです。もし、地球規模

表1 杉の木の本数

N O	地区	回 答 率	有回 答 効 数	本 数			1戸当り平均本数			残存率 (%)		
				70 年	80 年	90 年	70 年	80 年	90 年	対70年		対80年
										80年	90年	90年
1	西 部	56	53	240	128	118	4.5	2.4	2.2	53.3	49.2	92.2
2	北 部	37	33	11	4	5	0.3	0.1	0.2	36.4	45.5	125.0
3	能 町	6	6	42	30	20	7.0	5.0	3.3	71.4	47.6	66.7
4	二 塚	144	132	1,558	1,279	1,003	11.8	9.7	7.6	82.1	64.4	78.4
5	東 部	54	53	124	71	63	2.3	1.3	1.2	57.3	50.8	88.7
6	野 村	21	20	151	78	76	7.6	3.9	3.8	51.7	50.3	97.4
7	牧 野	21	17	143	75	63	8.4	4.4	3.7	52.4	44.1	84.0
8	国 吉	14	13	39	30	16	3.0	2.3	1.2	76.9	41.0	53.3
9	石 堤	62	41	444	265	143	10.8	6.5	3.5	59.7	32.2	54.0
10	東五位	47	40	246	153	75	6.2	3.8	1.9	62.2	30.5	49.0
11	佐 野	38	30	156	65	18	5.2	2.2	0.6	41.7	11.5	27.7
12	福 田	12	11	156	94	39	14.2	8.5	3.5	60.3	25.0	41.5
13	小 勢	54	53	590	397	286	11.1	7.5	5.4	67.3	48.5	72.0
14	立 野	31	28	185	129	64	6.6	4.6	2.3	69.7	34.6	49.6
15	二 上	33	29	140	98	65	4.8	3.4	2.2	70.0	46.4	66.3
16	守 山	52	39	97	64	45	2.5	1.6	1.2	66.0	46.4	70.3
17	太 田	30	27	265	135	73	9.8	5.0	2.7	50.9	27.5	54.1
	合 計	712	625	4,587	3,095	2,172	7.3	5.0	3.5	67.5	47.4	70.2

図1 屋敷林における杉の木の残存率（対70年）



で考えたとしても、地球の緑がこの20年間に半分になったとも言えるのです。

また、1980年の杉の木の本数を100とすると1990年は70.2%で、この10年間だけでも約30%減少しています。

なお、1970年に対して1990年の杉の木の本来の割合を地区別に比較すると、佐野が11.5%、福田25.0%、太田27.5%と約8～9割減少しており、逆に二塚64.4%、東部50.8%、野村50.3%と減少割合は半分以下にとどまっている。

一方、1990年に一戸当りの杉の木が最も多かったのは二塚の7.6本、次いで、小勢の5.4本、野村3.8本の順であり、逆に少なかったのは北部の0.2本、佐野の0.6本、東部、国吉、守山の1.2本であり、平均3.5本でした。

(2) 屋敷林に杉の木がない家の年代別比較

表2には年代別に、屋敷林に杉の木が全くない家の戸数を地区別に示しました。

1970年にすでに625戸中219戸、35.0%の家に杉の木がなくなっており、1980年には286戸、45.8%、1990年には339戸、54.2%と半数以上の家に杉の木が無くなっています。

杉の木の無い家は、1970年を1.00とすると1980年が1.31倍、1990年が1.55倍で、この20年間に5割以上増えたこととなります。

同様の比較を地区毎にすると、1970年に対して1990年に最も杉の木ない家が増加したのは、立野の3.60倍、次いで二塚の2.62倍、小勢の2.44倍の順となっています。

表2 杉がない戸数

N O	地 区	有回 答 効数	戸 数			比 率			増加比率			最っとも杉が多かつた家の杉の本数		
			70 年	80 年	90 年	70 年	80 年	90 年	対70年		対80年	70年	80年	90年
									80年	90年	90年			
1	西 部	53	29	36	36	54.7	67.9	67.9	1.24	1.24	1.00	68	72	72
2	北 部	33	28	30	30	84.8	90.9	90.9	1.07	1.07	1.00	5	2	3
3	能 町	6	3	2	2	50.0	33.3	33.3	0.67	0.67	1.00	30	20	10
4	二 塚	132	13	21	34	9.8	15.9	25.8	1.62	2.62	1.62	80	70	65
5	東 部	53	34	41	40	64.2	77.4	75.5	1.21	1.18	0.98	15	15	15
6	野 村	20	5	11	11	25.0	55.0	55.0	2.20	2.20	1.00	53	53	53
7	牧 野	17	9	8	9	52.9	47.1	52.9	0.89	1.00	1.13	50	20	20
8	国 吉	13	6	7	9	46.2	53.8	69.2	1.17	1.50	1.29	12	12	9
9	石 堤	41	16	19	24	39.0	46.3	58.5	1.19	1.50	1.26	60	40	36
10	東五位	40	15	18	26	37.5	45.0	65.0	1.20	1.73	1.44	30	16	16
11	佐 野	30	8	14	14	26.7	46.7	46.7	1.75	1.75	1.00	20	13	13
12	福 田	11	3	5	6	27.3	45.5	54.5	1.67	2.00	1.20	50	50	10
13	小 勢	53	9	17	22	17.0	32.1	41.5	1.89	2.44	1.29	70	63	50
14	立 野	28	5	13	18	17.9	46.4	64.3	2.60	3.60	1.38	30	30	24
15	二 上	29	10	13	16	34.5	44.8	55.2	1.30	1.60	1.23	20	20	15
16	守 山	39	19	23	30	48.7	59.0	76.9	1.21	1.58	1.30	25	25	25
17	太 田	27	7	8	12	25.9	29.6	44.4	1.14	1.71	1.50	50	15	10
	合 計	625	219	286	339	35.0	45.8	54.2	1.31	1.55	1.19	80	70	65

(3) 杉を切った理由

杉の木を切った理由では、家の増改築が最も多く、31.7% (226戸/712戸)、次いで道路の改修等が10.5% (75戸/712戸)、枯れる、暗い、葉が邪魔等の順でした。(表3)

一方、「今後、緑を増やしたいか」の問いに対して、「積極的に増やしたいか」がわずかに5.9%、「余裕があれば」49.0%、「特に思わない」が半数近くの45.0%を占めており、農村に住む者の緑の保全に対する意欲が極めて低いように思われる。

(4) 屋敷の回りの果樹

今日、外国農産物が大量に輸入され、今まで私達の身近にあった果樹が次第に見捨てられつつあります。

しかし、最近輸入レモンから日本では使用されない農薬が検出され問題になっています。特に、外国では輸出の際に収穫後に農薬を散布するポストハーベスト農薬の使用は普通に

行なわれており、農産物の安全性が問題となっています。

このような時、私達の身の回りに日常的に手にはいる安全な果樹を見直すことも必要なことと思います。

そこで今日、どのような果樹が植えられ、利用されているか調査しました。表4は、屋敷の回りに植えてある果樹の種類と本数を示したものです。

調査戸数 712戸に植えてある総果樹本数は4,827本であり、一戸当たり6.8本です。樹種で最も多いのは甘柿の1,688本35.0%、次いで

表4 家のまわりの果樹の種類と本数

No.	樹種	総本数	果樹総数に占める割合 ¹
1	甘柿	1,688	35.0
2	キュウイ	488	10.1
3	梅	481	10.0
4	栗	352	7.3
5	渋柿	299	6.2
6	イチジク	283	5.9
7	ブドウ	174	3.6
8	桃	137	2.8
9	リンゴ	130	2.7
10	梨	106	2.2
11	グミ	103	2.1
12	ゆず	90	1.9
13	小梅	78	1.6
14	サクランボ	78	1.6
15	ビワ	65	1.3
16	ザクロ	54	1.1
17	スモモ	50	1.0
18	イチョウ	35	0.7
19	ナツメ	25	0.5
20	ミカン	19	0.4
21	アケビ	17	0.4
22	クルミ	14	0.3
23	その他	61	1.3
	合計	4,827	100.0

表3 杉を切った理由

N	地区	増改築	葉が邪魔	葉が枯れた	暗い	道路等改修	その他
1	西部	10	4	4	1	3	3
2	北部	3	0	0	1	0	0
3	能町	1	1	1	0	0	0
4	二塚	58	8	8	8	24	18
5	東部	6	2	2	3	8	6
6	野村	11	1	1	1	1	0
7	牧野	2	2	3	0	1	3
8	国吉	3	0	1	0	1	0
9	石堤	16	3	1	5	9	1
10	東五位	20	5	3	4	4	0
11	佐野	13	1	2	5	2	4
12	福田	3	2	1	1	2	1
13	小勢	30	2	6	3	7	5
14	立野	18	1	2	2	2	0
15	二上	11	2	2	2	2	3
16	守山	8	3	1	2	4	2
17	太田	13	3	1	3	5	0
	合計	226	40	50	41	75	46

キュウイの488本10.1%、梅481本10.0%、栗352本7.3%（二上には、一戸で100本の栗の木がある家がありました。販売用であったので除外しました。）、渋柿299本6.2%、イチジク、ブドウ、桃等の順でした。

また、各樹種のある家の戸数及び割合を表5に示しました。

最も多いのは柿で、全戸の85.1%、次いで梅の42.1%、栗30.9%、キュウイ30.9%、イチジク29.8%、渋柿、ブドウ、桃の順でした。

表5 果樹のある家

No.	樹種	果樹のある家	果樹のある家の割合
1	甘柿	606	85.1
2	梅	300	42.1
3	栗	220	30.9
4	キュウイ	220	30.9
5	イチジク	212	29.8
6	渋柿	198	27.8
7	ブドウ	133	18.7
8	桃	94	13.2
9	グミ	89	12.5
10	梨	75	10.5
11	ゆず	73	10.3
12	小梅	64	9.0
13	リンゴ	63	8.8
14	サクランボ	61	8.6
15	ビワ	59	8.3
16	ザクロ	51	7.2
17	スモモ	42	5.9
18	イチヨウ	24	3.4
19	ナツメ	19	2.7
20	ミカン	15	2.1
21	クルミ	10	1.4
22	アケビ	10	1.4
23	その他	23	3.2

(5) 柿の木の本数変遷とその利用

ごく最近まで、青空に映えるたわわに実った赤い柿が、秋の収穫の豊さを告げていました。この柿が貴重なおやつでもあり、そこここに、柿の木に登る元気な子供達の声が聞こえていました。

しかし、今では見向きもされず、赤い柿が白い雪に晒されているのも珍しくはありません。先祖が守り育ててきた柿の木、今はどうなっているでしょう。

表6に1970年、1980年、1990年における柿の木の本数を地区別に示しました。（表4、5と本数が異なるのは有効回答数の違いによるものです。）

1970年は2,698本が、1980年には2,022本74.9%、さらに1990年には1,727本64.0%に減少しています。つまり、この20年間に約2/3に減少したことになります。

また、柿の全くない家は1970年には5.1%、1980年10.4%、1990年12.0%であり、杉の木より保存の状態がいいと言えます。（表7）

さらに、この柿を利用しているかについては、ほとんど食べているが40.3%、半分ぐらいが43.0%、ほとんど食べないが16.7%でした。先祖から受け継いだ貴重な果樹であり、栄養的にも価値の高い柿について再度見直したいものです。（表8）

(6) あなたは、さらに緑を増やしたいか

今後、「緑を増やしたいか」の問いに、積極的に増やしたいが、わずか5.9%、余裕があれば増やしたいが49.0%、特に思わないが45.0%でした。（表9）

手入れや、葉の始末など管理が容易でないことをうかがわせますが、地球規模の環境保全が叫ばれている今日、いかに緑を地球に根付かせるか、今後課題と言えます。

表6 柿の木の本数

N O	支 部	回 答 率	有回 答 効数	本 数			平均年数			減少率(%)		
				70 年	80 年	90 年	70 年	80 年	90 年	対70年		対80年
										80年	90年	90年
1	西 部	56	51	189	149	117	3.7	2.9	2.3	78.8	61.9	78.5
2	北 部	37	32	149	119	104	4.7	3.7	3.3	79.9	69.8	87.4
3	能 町	6	5	13	10	9	2.6	2.0	1.8	76.9	69.2	90.0
4	二 塚	144	130	592	446	392	4.6	3.4	3.0	75.3	66.2	87.9
5	東 部	54	51	230	150	118	4.5	2.9	2.3	65.2	51.3	78.7
6	野 村	21	20	138	90	77	6.9	4.5	3.9	65.2	55.8	85.6
7	牧 野	21	19	112	85	72	5.9	4.5	3.8	75.9	64.3	84.7
8	国 吉	14	12	34	30	31	2.8	2.5	2.6	88.2	91.2	103.3
9	石 堤	62	50	185	166	152	3.7	3.3	3.0	89.7	82.2	91.6
10	東五位	47	41	151	127	117	3.7	3.1	2.9	84.1	77.5	92.1
11	佐 野	38	36	168	106	94	4.7	2.9	2.6	63.1	56.0	88.7
12	福 田	12	11	38	31	10	3.5	2.8	0.9	81.6	26.3	32.3
13	小 勢	54	51	189	144	133	3.7	2.8	2.6	76.2	70.4	92.4
14	立 野	31	30	112	80	73	3.7	2.7	2.4	71.4	65.2	91.3
15	二 上	33	29	141	92	68	4.9	3.2	2.3	65.2	48.2	73.9
16	守 山	52	46	151	110	102	3.3	2.4	2.2	72.8	67.5	92.7
17	太 田	30	28	106	87	58	3.8	3.1	2.1	82.1	54.7	66.7
	合 計	712	642	2,698	2,022	1,727	4.2	3.1	2.7	74.9	64.0	85.4

表7 柿のない家

N O	支 部	有回 答 効数	戸 数			比 率			増加比率			最もも柿が多かつた家の柿の本数		
			70 年	80 年	90 年	70 年	80 年	90 年	対70年		対80年	70年	80年	90年
										80年	90年	90年		
1	西 部	51	3	6	5	5.9	11.8	9.8	2.00	1.67	0.83	13	11	11
2	北 部	32	0	0	1	0.0	0.0	3.1	—	—	—	15	15	13
3	能 町	5	0	2	2	0.0	40.0	40.0	—	—	1.00	5	5	4
4	二 塚	130	6	17	18	4.6	13.1	13.8	2.83	3.00	1.06	13	15	10
5	東 部	51	5	4	6	9.8	7.8	11.8	0.80	1.20	1.50	40	17	8
6	野 村	20	0	0	1	0.0	0.0	5.0	—	—	—	30	11	12
7	牧 野	19	1	1	1	5.3	5.3	5.3	1.00	1.00	1.00	15	11	10
8	国 吉	12	3	4	3	25.0	33.3	25.0	1.33	1.00	0.75	10	9	9
9	石 堤	50	3	4	4	6.0	8.0	8.0	1.33	1.33	1.00	11	10	7
10	東五位	41	3	4	6	7.3	9.8	14.6	1.33	2.00	1.50	11	11	9
11	佐 野	36	1	2	3	2.8	5.6	8.3	2.00	3.00	1.50	11	11	8
12	福 田	11	1	1	2	9.1	9.1	18.2	1.00	2.00	2.00	10	6	8
13	小 勢	51	3	3	5	5.9	5.9	9.8	1.00	1.67	1.67	13	10	9
14	立 野	30	2	4	4	6.7	13.3	13.3	2.00	2.00	1.00	12	12	10
15	二 上	29	0	5	6	0.0	17.2	20.7	—	—	1.20	20	20	20
16	守 山	46	2	7	6	4.3	15.2	13.0	3.50	3.00	0.86	10	10	10
17	太 田	28	0	3	4	0.0	10.7	14.3	—	—	1.33	10	10	7
	合 計	642	33	67	77	5.1	10.4	12.0	2.03	2.33	1.15			

表8 柿は食べますか

	回答数	比率
全部食べる	250	40.3
半分食べる	267	43.0
食べない	104	16.7
合計	621	100.0

II. 高岡市内の神社の杉の木の活力度調査

樹木の活力は、一般的に年数が経るに従い低下してきます。また、大気汚染などによっても活力は低下します。

現在、大気汚染による酸性雨等の影響により、樹木の活力は著しく低下してきていると言われています。

では、高岡市においてはどうでしょう。残念ながら、現在のところ樹木の活力度を広範囲に調査したものはありません。

そこで私達青年部では、今後の大気汚染等の指標とするため、市内の主な神社の杉の木の活力度を目視し、各樹木毎に記録し杉の活力度台帳を作成しました。台帳には、各神社における樹木の位置も記載し、将来も観察する観察木として1本1本を登録しました。

以下に、調査結果の概要について報告します。

表10 円周別活力度（高岡市内神社の杉の木）

円周ラン	本数	円周平均 (cm)	活 力 度			
			樹形	葉量	梢	計
0～49	47	38.4	4.1	3.8	4.3	12.2
50～99	281	78.5	4.2	4.0	4.5	12.7
100～149	330	119.2	3.9	3.7	4.2	11.8
150～199	95	167.7	3.5	3.3	3.7	10.5
200～249	57	221.1	3.4	3.1	3.8	10.3
250～299	42	268.3	3.7	2.8	3.7	10.2
300～	18	382.7	3.4	2.9	3.9	10.2
計	870	126.3	3.9	3.7	4.2	11.8

表9 家の緑を今後、増したいですか

	回答数	比率
思わない	303	45.0
余裕があれば	330	49.0
積極的に	40	5.9
合計	673	100.0

1. 調査方法

資料2の調査要領に基づき、市内56の神社、870本の杉の木の胸高周囲、及び樹形、葉量、梢の活力度を目視により5段階に判定した。調査は、1990年6月～7月実施した。

2. 調査結果

(1) 胸高周囲（円周）別、活力度分布

樹木は、年数が経るに従い活力度が低下する。そこで、高岡市内の神社の杉の木の活力度が、円周が増加(年数が経る)するに従い、どの程度活力度が低下しているかを検討した。(表11)

参考として1990年に井波町の散居村の屋敷林で実施した活力度調査の結果を併記した。(表12)

図1、2で示す通り、樹形、葉量は円周50～74cm台のものが、梢は75～99cm台のものが最も活力度が高かった。また、我々の分類で

表11 円周別活力度（井波町専勝寺の屋敷林の杉の木）

円周ラン	本数	円周平均 (cm)	活 力 度			
			樹形	葉量	梢	計
0～49	113	35.0	4.5	4.5	4.5	13.5
50～99	253	69.7	4.2	4.1	4.1	12.4
100～149	93	122.5	3.8	3.9	3.9	11.6
150～199	25	168.0	3.8	3.9	3.9	11.6
200～249	2	217.0	4.5	4.0	4.0	12.5
250～299						
300～	1	315.0	3.0	4.0	4.0	11.0
計	485	77.9	4.2	4.2	4.4	12.8

は梢が最も活力度が高く、次いで樹形、葉量の順であった。

これを散居村の屋敷林の杉の木と比較すると、屋敷林では葉量、樹形とも円周が増加するに従い、平行して活力度が低下しているが、高岡市内のものでは、樹形の活力度に比較して葉量がより活力の低下が目立つ。さらに、図2の通り、各円周に対する3種類の活力度とも散居村のものに比較してより低下している。

これらのことは、大気汚染等の影響とも考えられるが、今後さらに、年輪調査等を通じて確認する必要がある。

(2) 地区別活力度の比較

次に地区別の各神社の活力度の平均を示したのが表12、図3である。このままでは、各地区により年数の違うものが混在しており、比較できない。そこで図4に示した通り、調査した杉の木全体の円周別活力度の総合計の平均を示したグラフに、各地区の杉の木の平均の円周における活力度の総合点数をプロットした。この折れ線より上にある地区は、平均より活力度が高い地区であり、折れ線より下の地区は活力度が低い地区である。また、図中の◎印は工場地帯または、工場地帯に近いと考えられる地区である。

図に示す通り、◎印はすべて折れ線より下に位置し、平均活力度より低い。この原因は、工場の大気汚染の影響とも考えられる。しかし、環境条件が極めて良いと考えられる地区でも、この平均活力度より低い地区があり、今後さらに検討が必要である。

図2—(1) 樹形の活力度

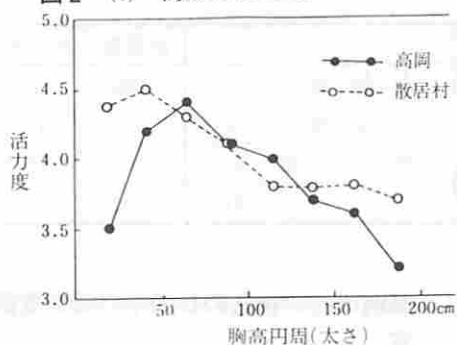


図2—(2) 葉量の活力度

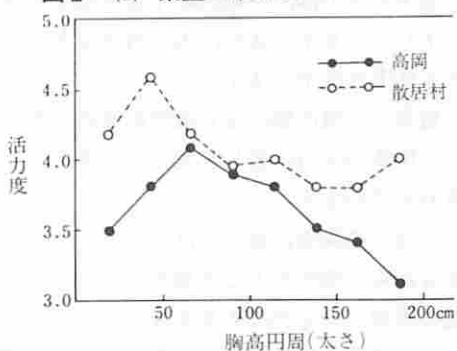


図2—(3) 梢の活力度

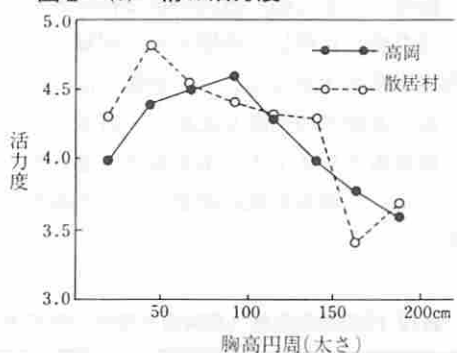


図2—(4) 合計(樹形+葉量+梢)活力度

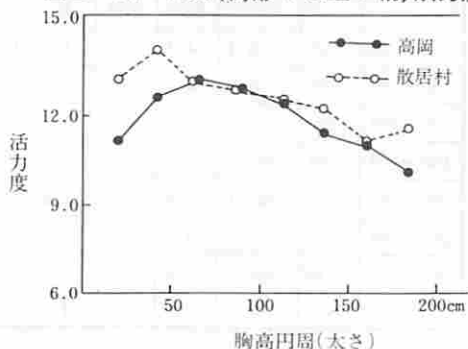
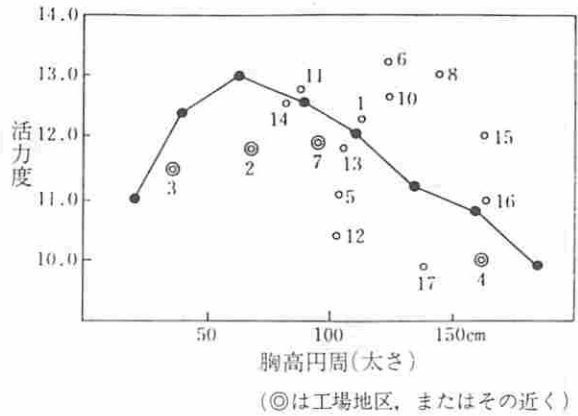


表12 地区別活力度

N O	地 区	調 査 本 数	平 均 周 圍 (cm)	活 力 度			
				樹 形	葉 量	梢	計
1	西 部	26	112.6	4.1	4.2	4.0	12.3
2	北 部	24	68.6	3.9	3.8	4.1	11.8
3	能 町	22	35.8	3.9	3.5	4.1	11.5
4	二 塚	95	162.1	3.2	3.1	3.7	10.0
5	東 部	26	104.0	3.5	3.4	4.2	11.1
6	野 村	43	123.5	4.1	4.1	5.0	13.2
7	牧 野	40	95.8	4.2	3.0	4.7	11.9
8	国 吉	179	144.2	4.6	4.0	4.4	13.0
9	石 堤	21	253.3	2.9	1.8	2.9	7.6
10	東五位	105	123.1	3.8	4.4	4.4	12.6
11	佐 野	37	85.9	4.1	4.2	4.4	12.7
12	福 田	57	104.7	3.9	2.8	3.7	10.4
13	小 勢	31	105.4	3.9	3.3	4.6	11.8
14	立 野	60	82.6	4.0	3.8	4.8	12.6
15	二 上	41	163.0	3.6	4.1	4.3	12.0
16	守 山	20	162.9	3.9	2.7	4.3	10.9
17	太 田	43	137.0	3.3	3.2	3.4	9.9
	合 計	870	126.3	3.9	3.7	4.2	11.8

図3 地区別平均活力度



子供を含め家族ぐるみで継続することになっている。また、緑を増やすための植林も計画されている。さらに、食べずに放置されている、安全で、新鮮な屋敷林内の柿を厚生連病院の患者さんに提供する計画もしている。

1990年ICA(国際協同組合同盟)のレイドロー会長は「21世紀における協同組合」と題した演説で、これからの協同組合は「Community建設を主動力としなければならない。そして自然環境保全と、健康な人間生活の建設という原点課題を忘れてはならぬ」と協同組合が自然環境の保全に取り組む重要性を説いている。

農業は命を生み出す産業、生命産業である。その農業に従事するものの協同組合、農業協同組合が、農産物のみならず、他の命、緑を守る運動に立ち上がってこそ、地球環境と、人々の健康を守ることができ、真に豊かな稔りを得る事ができるのではないだろうか。

(文責 大浦)

(3) 緑を育む協同組合運動を

農村は緑が多いと信じられてきた。ところが、調査の結果、農家の屋敷林の杉は、この20年間に熱帯雨林に劣らぬ速度で消失していた。また、樹木の活力度低下も無視できない。

にもかかわらず、農家の緑を再生する意欲は極めて薄弱であり、今後、「落葉の始末に困るので、さらに樹木を伐採したい」との意志を持つ者も少なくなかった。

高岡市農協青年部では、今後、より多くの組合員に緑に関心を持ってもらうため、台帳に載せた神社の杉の活力度調査を、今年度は

住所 _____ 番地 _____
 回答者氏名 _____ (才)

あなたの家の緑の調査

1990年

高岡市農協青年部
 富山県農村医学研究会

私達は、過去に「ゆたかな水を次代に」をテーマに農村に住む我々自ら手で水の問題について調査し、提言してきました。この度、その第2弾として「緑の調査」を実施することにしました。現在、「地球環境を守ろう」との呼び掛けは様々な組織で行なわれています。私達は、農村で命を生み出す産業である農業にかかわっています。この失われつつある自然を次代に豊かに伝えることは私達の使命とも言えます。そこで、現在の私達の置かれている現状を足下から明かにすべく、各家の緑の過去と現在の状況について調査致したくよろしくご協力下さいますようお願いいたします。(該当欄にレ印、または必要事項を記入して下さい。)

I. あなたの家の樹木について

- (1) 次の年代にあなたの家には杉の木がありましたか。(なかったら0本として下さい。また不明であれば?として下さい。)
- ①昭和45年頃(1970年) _____ 本ぐらい。
 ②昭和55年頃(1980年) _____ 本ぐらい。
 ③平成2年 (1990年) _____ 本。

(2) 昭和45年頃に比べ、杉の木が減った家の方は杉の木を切った理由を次の中から選んで下さい。(該当するもの、全てを選んで下さい) その他の場合は、具体的に理由を記入して下さい。

- ①家の増改築、新築等により邪魔になったので切った。
 ②葉が落ちて、始末が出来ないので切った。
 ③枯れてきたので切った。
 ④木があると家が暗いので切った。
 ⑤道路や用水等の改築により、邪魔になったので切った。
 ⑥その他 *具体的に書いて下さい。

II. あなたの家の果樹について

- (1) 現在、あなたの家にはどんな果樹が何本ありますか。表にあるもの以外にあれば、その他の欄に具体的に書いて下さい。

	種 類	本数		種 類	本数
1	甘柿		16	梅	
2	渋柿		17	スモモ	
3	リンゴ		18	ナツメ	
4	ブドウ		19	イチヨウ	
5	イチジク		20	コウメ	
6	栗		21	サクランボ	
7	びわ		22	アケビ	
8	キュウイ				
9	梨				
10	ざくろ				
11	グミ				
12	もも				
13	クルミ				
14	ミカン				
15	ゆず				

- (2) 次の年代にあなたの家には柿の木がありましたか。(なかったら0本として下さい。また不明であれば?として下さい。)

- ①昭和45年頃(1970年) _____ 本ぐらい。
 ②昭和55年頃(1980年) _____ 本ぐらい。
 ③平成2年 (1990年) _____ 本。

(3) 現在、柿の木があるお家では、なっている柿を全部食用にしていますか。

- ①ほとんど食べている。
 ②半分ぐらいしか食べない。
 ③ほとんど食べない。

III. 貴方は、今後、家や地域の樹木を増やしたいと思いますか。

- ①特に思わない。
 ②余裕あれば増やしたい。
 ③積極的に増やしたい。

IV. 自然や緑について思うことがあれば書いて下さい。

〈資料2 杉の木の活力度調査要領〉

支 部 名	支 部	調 査 日	1990年	月	日
調査参加者名					

活 力 度 調 査 要 領

11. 樹木の位置の概略図を作成し、各杉の木の番号を付ける。

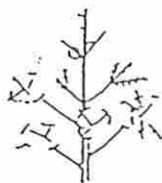
* 次年度以降も該当の樹木が判るような概略図を作る。(鳥居や狛犬、本段、参道等の位置も書きこむと判りやすい)

2. 杉の胸高の周囲を巻尺で測定する。

3. 杉の活力度を次のように判定する。

(1) 樹 の 形

活力度 1



葉がほとんどなく、枝ばかりが目立つ

2



枯れた梢や枝先が見え、葉は少し

3



枝が見え、葉が枝先だけに着いている。

4



先端が丸くなっている。

5



樹冠が三角形に劣っている

(3) 葉 の 量

活力度 1 ……葉が 3 割未満 (29%以下)

” 2 ……葉が 3 割以上 (30~69%)

” 3 ……葉が 7 割以上 (70~89%)

” 4 ……葉が 9 割以上 (90~99%)

” 5 ……葉が 100%

(3) 樹木の最も高い梢の状態

活力度 1



梢がはっきり見える

2



梢がかなり見える

3



梢が少し見える

4



先端の葉量が少なく、透けたように見える

5



先端は全く見えず